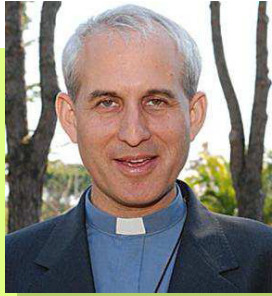


CAGLIERO¹¹

カリエロ 11

サレジオ会宣教ニュース N.71 - 2014年11月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



友 人の皆さん、

今月の11日がまた近づいています。私たちは生き生きとした感動をもって、1875年の11月11日を思い出します。先日、9月28日に行われた第145回宣教派遣を含む、その後のすべてのサレジオ会宣教派遣の預言となった日です。

少しずつ、各管区で、各支部で、毎月の11日は宣教の日として形と色を取るようになっています。さまざまな取り組みが生まれています：宣教の口ザリオ、共同体での宣教の集い、宣教体験を聞くこと、グループや個人の宣教派遣などです。

扶助者聖マリアを記念する毎月の24日、ドン・ボスコを記念する毎月の最終日と共に、11日は“温度計”、また“かがり火”となるべきです。私たちの心、支部、プロジェクトの宣教の温度を測る“温度計”。“宣教する力を奪われないようにしましょう”（『福音の喜び』109）とフランシスコ教皇は主張しています。そして、日々の教育的・司牧的取り組みの宣教の地平に向けて、私たちを導く“かがり火”です。その導きに助けられ、私たちは立ち止まることがありません。

宣教促進担当者の皆さんが、毎月のこの11日のもたらす素晴らしい機会を、特に今月、11月、活かすことができますように！
感謝！

J. Basanes

宣教顧問
ギジェルモ・バサニェス神父

1875年11月11日に植えられた種は、いのちあふれる木となった

『メ モリエ・ピオグラフィケ』は、139年前の第1回宣教派遣について伝えています：

「とうとう、11月11日は明けた……南米に向けて、宣教師の一人は出発する……それは、ヴァルドッコというトリノの辺鄙な一隅に暮らす人々の目には、驚異的な出来事と映った。マグニフィカトが歌われると、宣教師たちが二人ずつ並んで現れ、彼らのために取っておかれた聖域の中央の席に着いた。司祭たちはスペイン風のいでたちで、舟形の帽子を手に持ち、修道士たちは黒のスーツを身につけ、山高帽を手にしていた。……

夕の祈りが終わると、ドン・ボスコが説教壇に上った。ドン・ボスコの姿に、教会を埋め尽くした群衆は静まり返り、皆、その言葉一つひとつを熱心に飲み込みながら感動に震えていた。宣教師たち自身について話が及ぶたびに、ドン・ボスコの声は詰まり、ほとんど唇の上で言葉が消えるかのようなようだった。ドン・ボスコは雄々しく涙を抑えたが、聴衆は泣いていた。……ドン・ボスコは語りかけた。『私たちは大きな仕事にのり出しています。それは自負心からでも、数日で全世界を神へと回心させられると信じているからでもありません。しかし、何が起こるか、誰が予測できるでしょうか。この出発、このささやかな始まりは、力強い木に成長する種かもしれません。……』(MB XI,356-360)

サレジオ精神の不可欠な要素であるこの宣教精神のおかげで、今日、ドン・ボスコのカリスマは132か国に広がっています！ 1875年の11月11日に植えられたあの種は、本当にいのちあふれる木となりました！



ベルギーでの宣教 チャレンジと喜び

修

練準備期を過ごしていたとき、私はイザヤ書6章8節を読みました。「その時、わたしは主の声を聞いた、『わたしは誰を遣わそうか。誰がわれわれのために行くだろうか』。わたしは言った、『ここに、私がおります。このわたしを遣わしてください』。神が自分にこの言葉を語っておられるように私は感じました。後で祈りのうちに、イザヤの応答も私自身のものになりました。「自分の国で、あるいは海外で、サレジオ会宣教師として神の愛を人々と分かち合いたい!」という宣教の望みを、私は3回にわたって修練長に話しました。しかし、答えはいつも同じでした：「なぜ海外で宣教師になりたいの？ インドネシアも宣教師が必要でしょう!」

時とともに、宣教師として外に出かけて行くようにと呼ばれる神の声をもはや断れなくなりました。そこで、自分の望みを、ポスト・ノビスの院長に再び話しました。しかし、やはり同じ答えでした：「インドネシアに宣教師が必要!」このことで、私の宣教の望みが消えることはありませんでした。インドネシアに宣教師は必要だけれど、ここには召命がある一方、サレジオ会のほかの管区、また教会のほかの地域では、主のぶどう畑で働く労働者が必要だとも思いました。こうして、ポスト・ノビスの2年目に(院長の許可をもらわないまま)、私は直接、宣教顧問のフランシス・アレンチェリー神父に手紙を書くことにしました。2か月後、宣教師になる準備をするようにとの返事をもらいました。

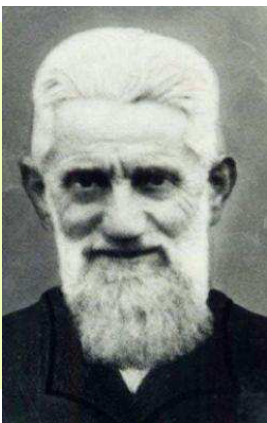
2010年、インドネシアを訪問した新しい宣教顧問のヴァツラフ・クレメンテ神父に、宣教師になりたいという望みを話しました。一か月後、クレメンテ神父から、ベルギーに宣教師として派遣されることになったと知らせがありました。ようやく宣教師としての召命を実現できると、私は大きな喜びに満たされました。ベルギーに来て4年になります。宣教師であれば皆どこでも同じですが、この4年のあいだ、地元の人々とコミュニケーションを取れるように、私はフラマン語の習得に特別に力を入れました。食べ物、気候、メンタリティー、生活に適応しなければなりません。現地課程もこちらで行い、現在、ルーヴァンで神学を学んでいます。

ベルギーで暮らすのは簡単なことではありません。毎瞬間が挑戦であり、私は信仰と喜びをもって受けとめるように努めています。世俗主義、物質主義、合理主義などが大きな挑戦として立ちまわります。現代社会に与えるその影響のため、宗教や神、信仰について、特に若い人と話すことは、しばしば制約を受けます。実際、これらの話題をベルギーのほとんどの若者は重要ではないと思っていることを、私は知りました。この世俗化した環境は、私たちサレジオ会宣教師にも影響を与えます。深い霊性を持たなければ、単なるソーシャル・ワーカーになってしまうかもしれません。もっと悪い場合、私たち自身が世俗的なライフスタイルを生きるようになってしまうこともありうるのです。

では、どうしたらベルギーで福音を告げ知らせることができるのでしょうか。私の体験を分かち合いたいと思います。ある日、数人の若者たちが、私がサッカーをしているのを見て、サッカー選手なのかと聞いてきました。「ちがうよ」と私は答えました。「サレジオ会員だよ」。「サレジオ会員って何?」と一人が尋ねました。「サレジオ会員というのは修道者の司祭がブラザーのことだよ。」もう一人が尋ねました。「ベルギーで何してるの?」「僕は宣教師なんだ」。「えっ? ベルギーに宣教師! そんなの変じゃねえ?」と彼らは驚いて言いました。そこで私は言いました。「僕は真正銘の現代の宣教師だよ!」この何気ない出会いを通して、私は彼らの友達になりました。今、私たちは宗教、信仰、神について話しはじめています。若者たちは私を宣教師としても受け入れてくれました。実に、この世俗化した、物質主義的、合理主義的な社会で、友情がキリストを告げ知らせる道を開いてくれることを私は発見したのです。

私はここベルギーで宣教師として働けてとても幸せです。皆さんの祈りに助けられ、私たちの宣教のあかしとキリストを告げ知らせる努力は、いつか豊かな実を結びましょう!

インドネシア出身、ベルギーの宣教師
アントニウス・ベレク神学生



サレジオの宣教の聖性のあかし

「茶色い顔と純粋な心のこの愛すべき子どもたちを結ぶ本当の兄弟的絆は、いつも同じです：愛徳と礼儀です。子どもたちは愛されていると知っています、それだけです。そして私たちの世話に応えようと頑張ります、それぞれの小さな犠牲を払ってでも。」(1926年10月)

北東インドの新しい聖フランシスコ・ザビエル、福音の燃える使徒神の僕コンスタンティーノ・ヴェンドラメ神父(1893年-1957年)
ボレッティーノ・サレジアノ誌への寄稿より



南アジア地域のサレジオ会のために

サレジオ会の宣教の意向

南アジア地域のサレジオ会が、そのすべての教育・社会事業に献身し、奉仕の対象であるすべての人が社会的に力をつけるよう、取り組みますように。

サレジオ・ミッションという大いなる運動の中で、私たちは時に福祉活動のレベルにとどまる誘惑に駆られます。一字の読めない人をなくす、質の高い教育を提供する、学校に行けない若者に優れた技術的養成を提供する、ストリートチルドレンを救うなどの活動です。しかし、自分たちがまずナザレのイエスの弟子であることを少しづつ忘れてしまうこともありえます。イエスの答えは、人類をあらゆる悪から救うことでした。それには物質的、社会的な抑圧も含まれます。私たちが貧しい人々に差し出すことのできる最良のものは、福音と私たちを自由にしてくださいの聖霊です! 改宗が私たちの直接の目的ではないにしても、洗礼を受けることをはじめ、私たちのあらゆる言葉や行いにおいてイエス・キリストを告げることは私たちの権利です。それはそれぞれの生涯を通して、自分自身の召命のために大切なことです。

